

第2回豊岡市大交流（観光）ビジョン策定委員会 会議録（要約版）

開催日時 平成30年9月3日（月）13時30分 ～ 15時30分

開催場所 豊岡市役所本庁舎2階 大会議室

出席委員 平田委員長、山田委員、倉成委員、岡野委員、井垣委員、樋口委員、西村委員、宮崎委員、
渋谷委員、岡田委員、植村委員、前野委員

欠席委員 国枝委員、田中委員、昆野委員、青山委員

事務局 小林環境経済部参事、大交流課 谷口課長、吉本課長補佐

資料

1. 豊岡市大交流（観光）ビジョン策定委員会 委員名簿
2. 豊岡市大交流（観光）ビジョン策定委員会 協議資料

■主な議事

1. 開会

2. 委員長あいさつ

（委員長）：観光における豊岡の節目、自由にご意見を頂戴したい。本日は10年後の豊岡の「ありたい姿」にフォーカスを絞り議論いただきたい。

3. 委員紹介

第1回委員会以降、新たに委嘱した委員及び前回欠席だった委員から自己紹介を行った。

4. 資料の説明

事務局より資料2に基づき以下の説明を行った。

- ・ 世界・国内の観光情勢について
- ・ 本市における観光等の状況について
- ・ 前回の意見集約及び本日の議論内容について
- ・ 「小さな世界都市」の実現に向けた10年後のありたい姿について

5. 協議資料「小さな世界都市」の実現に向けた10年後のありたい姿について

各委員より、10年後の豊岡市のありたい姿についてビジョンに向けた意見を述べた。主なコメントは以下の通り。

（委員長）：徳島県の阿波踊りを例にとると多数の観光客が来ているのに赤字になっている。改善がなされなかった。行政と観光協会の有機的な連携が弱い。専門職大学の基本構想案、評判はいいが観光に利用されているのではないかという一部のご意見あり、アート側の視点だと「なぜ観光と一緒になのか」という意見もある。観光のイメージが低い。18歳時点で観光を目指す高校生が少な

い。先進国ではサービス業は憧れの職業だが、途上国ではそうならない。構造的な人手不足はあるものの、観光産業に人が来ない。憧れの職業にする必要がある。そのためには、教育なのか、社会包摂的なものなのか、今までの狭い意味での観光政策だけでは恐らく限界があり、まちづくりと密接に関係してくる。

(委員)：城崎温泉の観光客宿泊数 90 万人泊以上を目指す。外国人であれば 1.4 泊から 2 泊以上に。従業員給与を 350 万円から最低 400 万円まで増やしたい。それには売上を 3 億円ほど増やす必要がある。田舎に住んでいてもそれなりの経済環境がある状況を目指すべきで観光 GDP の目標設定が必要。観光客と同時に定住人口を増やす政策が必要。コンテンツはいっぱいあるのでコンテンツを知っていただくことと、安価で自身で手配ができる二次交通の整備が必要。既存の延長線上では困難。ブレークスルーが必要。車を入れない街づくりも 1 つの案。

(委員)：人手不足が課題。観光客と同時に住む人がいないと労働力の確保ができない。両方集める必要がある。

(委員)：竹野ではこれ以上の集客を求めない事業者もいる。後継者がいない民宿が多い。インターネットにも載せず、お客さんが泊まりたくても泊まれない状態。観光協会が取りまとめて入ったお客さんを配分していく仕組みが有効では。

(委員長)：竹野も神鍋も特定シーズンで成り立っているため、通年集客の経営努力をしない。その結果、通年雇用もしないから経営努力もできない。この悪循環をどう断ち切れるか。

(委員)：城崎温泉でも通年雇用したいが辞めて帰ってしまう。まちの中に若い人が集える機会をつくと定住につながるのでは。来年度国策として外国人受け入れが始まる。よく考えて使う必要がある。

(委員長)：大学側もアジアの一流大学との連携で留学生を受け入れる計画。大きな期待がもてる。後継者難の問題は、親が子供に継がせないこと。憧れの職業になっていないことによる悪循環をいかに断ち切るか。

(委員)：城崎から行ける範囲で体験プログラムを作るときに、交通の便が課題となる。最近訪れた台湾では UBER が非常に便利。豊岡ではいいものがあるのにつながらない。城崎町内のトンネルは通してほしい。旅館の手伝いをすることがあるが、下に見られている感じがするのがよくわかる。ただ、他所からこられた母子家庭のお母さんなどはこんなにいい会社はないとおっしゃる。合う人が来たら一緒に頑張ってくれるのではないか。

(委員)：但東町の宿泊施設はシルク温泉以外は厳しく、外部から稼ぐ額が少ない。逆転の発想で、不便なところ、田舎の良さはそれでよい。民家が空けば民泊をやり、都会の方のセンスを取り入れながら活動していければビジネスチャンスになる。但東町の課題は予算や人口が少なく、開発部がないため、素材はあっても目玉の食が出てこない。商品開発に繋がらない。人口が減少していく中で、田舎で民泊とキャンプができれば面白い仕事が増えるのではないか。

(委員)：観光産業に従事しているなかで、これ以上の集客を求めない事業者がいるのは実感している。身体的にきつい、今のままで増やしたらもたないという意味。仕組みを整備して増やす必要がある。事業に覚悟をもって取り組む人が少ない。息子に継がせるのではなく、地域の企業・金融機関との連携で事業をつなげて、覚悟を持った人が事業を続けることができればよい。

(委員)：観光に来たい町、住みたい町、働きたい町の三つが重要。いいおもてなしには住みたい、働き

たいという点で働き手を増やすことも重要。竹野、城崎、豊岡がつながっていない。一つ一つのつながりを地道にやっていくことがリピーターにつながる。豊岡の観光客の 80%が関西の 3 県から来ている。もっと日本で遠くの人を呼ぶことができるのではないか。この 3 県から来たら 1 泊しかしない。東北や沖縄からくれば 2 泊になるのでは。まだまだ潜在能力はある。ここにインバウンドを足し合わせるとよい。人口減が手遅れにならないように、全員が楽しむことが一番大切。

(委員長)：温泉地の宿命として、東京の人は箱根等、近場に行きがち。温泉だけで城崎にだけ来ることはないので、今までのビジネスモデルを変えないと、遠隔地からは集客できないのではないか。

(委員)：想像してほしい。インバウンドに注力すると、海外の方や観光関連事業者が住みだす。生活等価値観が違う方が学校の父兄の集まりにでてくる。これをどう考えるか。沖縄の場合、東京なり海外からの投資が多いので沖縄の GDP が上がらない。地域外からの投資をどう考えるべきか。逆に観光振興しながら地域内で回していくとなると、地域内の事業者も頑張らなければならない。観光をやっていくときに、異文化コミュニケーションをどう考えるかは大きな問題。もう一つ、環境問題。観光セクターだけではなく、地域全体で取り組まなければならない。これは地域の方から見れば少し窮屈。これをどう考えるか。豊岡市は他の地方都市と比較してもキレイ。こういう地域だからこそ、外部の方が入ったときにコミュニティをどうしていくべきかは重要な論点。

(委員長)：富良野の小学生 11 人のうち 6 人は外国人。富良野ではそれが普通。豊岡の教育方針については多様性の準備は進めている。

(委員)：豊岡では、まちの人が自分の町を話し始めると止まらないほど自分のまちを好きなところがよい。過去からの哲学を守りつつ、ぶれずに工夫を積み重ねている点もよい。住民の愚痴も少ない。うまくいっているのに先手を打とうとしている点も良い。住んでいる人が楽しむという概念はよい。しかし、海外の概念を持ってくるのは少し違和感。日本版〇〇というのはいらない。小さな世界都市で地域固有で世界から尊重されるまちになろうというのが自身の言葉でできているのがよい。しかし、豊岡は行くとなんかしてくれるのかということはどう伝えるかが課題。一つは、健康的で文化的で最低限の生活を保障するという基本的人権の言葉そのものがこのまちにある。温泉、愚痴の少なさが健康的。文学、アートが文化的。ほかのまちでも健康的はやるだろうが、文化的は即効性がないため置いてきぼりになっている。コウノトリの農業も文化的。歴史も教育も進んでいる。人間の生活に必要な要素をきちんと押さえている都市。世界でも SDGs といわれており、これをおさえられている、というのが良い。もう一つは、志賀直哉の話から「ここにいると、いろいろ湧いてくる」という言葉。要はインスピレーションではないか。城崎のアートセンターはもちろん、コウノトリと農業の話もそれを見た人は農業だとしてもエコロジーだとしてもインスパイアされる。昔から文豪がいたのは、21 世紀版だとアートも、テクノロジーも、農業も、エコも教育も色々なことがインスパイアされるというまちの可能性がある。

(委員長)：作家仲間も城崎にすれば「何か書けそうな気がする」という声もある。

(委員)：「豊岡っていいね」というところ。住みたい町、行きたい町には「いいね」と思うものが無いとダメ。城崎はよく知っていたが豊岡にあると知ったのは数年前。豊岡に行ったことや豊岡で買ったものなどが自慢になるまちになるのが重要。豊岡にあるいいものがきちんと伝わっていな

いのではないか。10 県以上見てきたが、「売り出すものがない」というところが多いなかで、豊岡市は一つに絞ることが難しいほど観光資源（素材力）がある。豊岡ブランド、豊岡品質の確立が必要。豊岡に行けば何か楽しいことがある。じゃあ今年も豊岡に、というように、ブームではない取り組みが必要。豊岡の品質の良さを感じる豊岡ブランドを国内外に広げ、誰もが知っている豊岡にしたい。

（委員）：単なる観光開発になってはいけない。地域住民も含めて幸せになることが重要。地域交通が復活する。とある都市ではバスに乗れない状態にもなったという。いかに自立していくか。まちにとってマイナスになっては意味がない。また、自発的である必要がある。個人旅行が増えてきて、テクノロジーが発達している。住民自らが商品開発・PR して儲けていく仕組みも議論したい。その中で豊岡観光イノベーションを作ったので、観光協会とも協力して仕組みとして作っていききたい。マーケティング調査では、リラクゼーションができなかったという声もあった。楽しめなかったという声も。アート等いろいろなものを結びつけていきたい。10 年後もまちを引っ張っていきようなビジョンを作りたい。

（委員）：ある旅行会社が団体旅行の方針を説明。1500 件扱ったが今は 1000 件。旅行会社が生き残るために送客先を絞ることで収益性を上げたいとのこと。我々はお客様とつながるようにファンづくりをしていきたい。

（委員）：豊岡はストーリーを持っている。大事なものを取り戻してきたという歴史があり、これを話すと外国人はすごく尊敬する。ファンを作ることこそが観光であり、物見遊山ではなく自分たちの生きざまを伝えることが大事。

（委員長）：豊岡市では小中学校ではふるさと教育に力をいれているものの、観光教育はまだまだ。ひとり親世帯や所得が低い方を旅館に招待する等の社会包摂的な取り組みなどにより、子供のうちに観光業の良さを感じてもらう必要があるのでは。豊岡市民でも城崎や出石に行ったことがない人もいる。最後は口コミ。城崎の中居さんが出石を勧めるなどの相互交流を計画的に実施していく必要がある。

（委員）：九州の復興割は、遠方を狙ったのだが、どちらかといえば利用者は近隣の方、普段宿泊するには高いけど何か支援したい方が多かった。旅館の人は、地元の客を相手にすると関係性が変わって、地域とのかかわり方を考え直すようになったとの声。コミュニケーション量を増やすのが大事。ハワイの宿泊・飲食産業は平均給与の 6 割ぐらいの水準。観光産業が強い地域でも相対的には高くない。これを並みの水準にしようというのはハードルが高い。ただし、観光業は世界につながっているという側面がある。お客さんが国際化し、宿泊業で働くと自分の働く場が世界に広がる。地元の企業に就職して 10 年後に海外で働いている可能性がある職業は観光くらい。世界的な広がりに関心をもって、ローカルなのだけでもグローバルにつながることの面白さは、その職業に対して興味を持ってもらうかの大きなインパクトになるのでは。

（委員長）：倉敷商業高校の国際コースは倉敷の外国人向けのボランティアをやり、モチベーションがすごく高まる。高校ぐらいで地域ボランティアで外国の方と触れさせるとそのまま地域に残る率が高くなっていて、教育に連動させることが重要。

（委員）：鹿児島では若い人が戻ってきている。若い世代の方がこういう場に交じっているのが似ている。大和桜酒造という芋焼酎屋は、フットワーク軽く、福岡のバーテンダーと連携して芋焼酎の

ハイボールやカクテルを開発。「重く作って軽く売る」がキーワード。こだわって作る。別の言葉では「こだわりと関わり」。不易と流行、正攻法と奇策というのは昔からあるが、こだわりが、しっかりと軸があれば、コラボレーションを軽くやっても大丈夫。少しはみ出したことをやっても自信があるので、常に戻ってこられる。こだわりが足りなければ重く軸をつくるのがよい。

(委員)：私が城崎に住めてすごく幸せという話をしたが、それが子供に伝わって、子供はノートに旅館の名前をたくさん書いている。これは、子供がよく観光客に旅館の場所を聞かれるから。聞かれたときに教えられなかったことが申し訳なくて、次に聞かれたときには完ぺきに教えられるようになっておきたい。「みんながわざわざ来るところに私たちが住めている」。こういう発想がもっと広がれば希望がある。

(委員長)：城崎の小中学生は物おじせず、外国人にも慣れていてコミュニケーション力が高い。これが広がればよい。いくつか課題を。従業員の方にセカンドステージがない。城崎の旅館で10年働いていたらのれん分けして神鍋で起業できたという夢があるとよい。お金だけでは人は集まらない。大学でも起業をカリキュラムに入れているので、そこをやっていきたい。次に、ブランド化。富良野の場合、外からの資本が多いものの、地元事業者との取り合いにはなっていない。豊岡が自力をつければ、外から入ってきても相乗効果で潤う。自力をどれだけつけられるかが大事。最後に、外国の方にも住んでいただくこと。豊岡市は他の自治体と比べると相当オープンなので教育を進めていけば大丈夫だと思う。江原の住民との話で、江原には全国から工場に集まって発展した町だから外国人が来ても大丈夫という話があった。これを現在にあわせて、教育に落とし込むことが我々の仕事。

6. その他

- ・ 次回は本日の議論を踏まえ、具体的なありたい姿に向けてフレーム案を事務局より提示予定。
- ・ 事務局から次回委員会は10月22日、15時00分からと連絡があった。

以上